

インテリ美女との束の間の交流

～丹羽病院入院日記（抄録）～

2020年9月末から10月中旬にかけて小田原市荻窪の「丹羽病院」に22日間入院しました。病名は「急性虫垂炎」、我々が子供の頃は（いや、かなり大人になっても）「盲腸炎（単に盲腸と呼ばれることも）」と呼ばれていました。そして同じく子供の頃からの「常識」として「盲腸炎にかかったら有無を言わず手術で盲腸（虫垂）を切除する」と聞かされてきました。実際、11期同期諸兄弟の中にもかつて盲腸炎を患って入院、即手術を受け盲腸（虫垂）を切除されてしまった方がかなりおられるのではないのでしょうか？私も急激な腹痛で搬送された丹羽病院で急性虫垂炎と診断され、入院が決まった時はまず間違いなく炎症を起こした虫垂は切除されるものと思い込んでいました。ところが病室に来られた主治医のM医師は虫垂炎は今ではほとんど切らずに薬（抗生物質）を投与して治すそうで、私も10日間絶食して入院。その間に状況を見て判断することになりました。

ちょうどこの時期に私は20数年に亘って続けてきた分譲マンションでの一人暮らしに終止符を打って、生活支援をしてくれる「老人ホーム」のような施設に入居することを考え始めていました。一方居住していたマンションの管理組合の5人の理事の輪番が回ってきて引き受けることになっていました。その5人の中に韓国人女性（以下Lさん）がいました。女性の年齢は見た目だけではよく分かりませんが私には50歳前後に見えました。私がこのマンションに入居したのは2007年2月でしたが、それより2、3年後に彼女が入居してきました。部屋は私と同じ3階で一軒置いた隣に一人で住んでいました。均整の取れた美人で日本語はペラペラ。それまではすれ違ってほとんど会話することはありませんでしたが、月に一度の理事会で何度か顔を合わせることになり自然に会話することが増えました。お互いの電話番号をスマホに登録することによって無料通信アプリ「LINE」でも連絡できるようになりました。

こうして新しい居住地探しと現在居住中のマンションでの管理業務という一見相反する作業に追われているさなかの9月29日（火）、早朝からの急激な腹痛に救急車を呼び丹羽病院に運び込まれました。その後の経過は当時の日記を以下に引用しますからご覧ください。ただ、80歳を超えた老人の入院生活をダラダラと記述した文章を読まされても面白くもおかしくありませんから、適当に省略したり誇張したりしてお目にかけます。特に入院生活22日間のうち最後の5日間の「インテリ美女との束

「**の間の交流**」の部分が今回お話ししたい最大のテーマなのでその辺を多少膨らませて記述することをご寛恕ください。

救急車で丹羽病院へ

2020年9月29日（火）

朝起きた時から腹が痛くてトイレに座ると便通はあつたが痛みは収まらない。物を食べる気が起きず、ソファに座ったまま時を過ごした。ラインで香織（姪）に誕生日のお祝いを送ったり、L（同じマンションの韓国女性）さんや辰巳のメンバーと交信しているうちに、痛みは増してくる。この間トイレに5回入ったが、下痢はせず正常な便ばかり。但し量は異常に多かった。このまま我慢しても良くなるとは思えずとうとう救急車を呼んだ。熱は37度8分あつたが今度はちゃんと対応してくれた。消化器専門の丹羽病院に搬送された。鶴井家（亡妹の婚家）の者に連絡してもらったり、いろいろな検査や問診を受けて3階の307号室に入った。それからラインや電話で各方面に連絡した。驚いて駆け付けてくれた吉男さん（義弟）には、病名は**急性虫垂炎（盲腸炎）**ですぐに手術はせず**10日入院して投薬、その間が絶食**。点滴と水分だけで過ごさなければならぬとのことなどが病院から告げられた。

絶食10日間だって？

2020年9月30日（水）

入院第一夜が明けた。長い夜だった。右腕に点滴の針が刺さったままなので身動きが不自由だ。夜中にトイレに起きたのは2回だったので助かった。この日の私の**担当看護師は中国人の女性劉さん**。片言の日本語で一生懸命説明してくれる。救急車に乗った時、持って来たものは家のカギ、カード類が入った財布、健康保険証、マイナンバーカード、手帳とボールペンだけ。とりあえずすぐに必要なものを吉男さんに取りに行ってもらうことにした。劉さんに書いたメモと家のカギを預けて吉男さんに渡してもらった。頼んだものは「**下着類**」「**老眼鏡**」「**点眼薬**」「**スマホ充電器**」「**腕時計**」の五つ。特にスマホは午前中にバッテリー切れ。夕方に届けてもらえて助かった。主治医のM医師がベッドまで来て状況を説明してくれた。虫垂炎は今はほとんど切らずに薬で治すそうで、私も**絶食のまま10日間入院**してその間に状況を見て判断するそうだ。

Excelでつけていた日記はどうする？

2020年10月1日（木）

スマホの通話履歴をチェックしている時、うっかりKさん（Happyケア社員で施設探しの協力者）にかけてしまった。今日行くことにしていた**ココファンレジデンス小田原**（介護付有料老人ホーム）には返事を迫られているような節が感じられる。私も覚悟を決めて「話を進めて結構」と返事。**ずっとExcelでつけていた日記が中断**

しているので気になっていたが、スマホのメールに記録してそれをパソコンのメールソフトに送ればいいと思い付いた。早速一昨日の事の起こりから書き始め、今日が三日目になる。今日は中澤（秀夫・11期生で幼少時からの友・辰巳グループ）が新聞や週刊誌などの差し入れを持って来てくれた。ジム仲間の澤田さんにもメールで連絡したところすぐに見舞いに来てくれたが面会は不可。相変わらず何も食べられず口に入れられるのは水分だけ。腹が減って目が回る。

手術せずに済みそうだ！

2020年10月2日（金）

昨夜は寝ている間お腹がシクシクしたり盲腸の辺りが痛かったりしたが激しい痛みではなかったのでナースコールはしなかった。ただ排便できそうな気配は何度もあり、この度にトイレに行ったが結局出るのは小水のみ。一晩中寝苦しかった。今日は朝に採血があり、午後は腹部のCT検査があった。今日も一日中ライン仲間たちとトークを楽しんだ。私が入院してから日中の看護師は劉さんだったが、今日の日勤は男性の看護師だった。私の年代は看護婦と呼ばれ全員女性だったので男性看護師にはどうしても違和感がつきまとう。今日の男性看護師は落ち着いていて好感が持てた。私の血圧が高めなのを今までは劉さんも他の夜勤看護師もそのままにしていたが、彼は降圧剤を手配してくれた。おかげでずっと170以上だった血圧が140に下がった。翌日から起床時に飲むように指示された。17時に主治医が病室に来て、手術せずに済みそうではあるがまだ患部に炎症があり、絶食は続けなければならない、と言われた。

（省略）

2020年10月3日（土）

横浜の従弟も老人ホームに・・・

2020年10月4日（日）

（中略）2日とは違う別の男性看護師の態度が上から目線で子供にでも言って聞かせているようだ。ナースステーションの中では意思統一はできているようだが、そのことはこちらには全く伝わっていない。さすがに腹が立ってきちんと抗議しておいた。まあ、こんなことも退屈でつらい絶食生活の一つのアクセントにはなったが…今日は入院患者の朝食の匂いが一際鼻について困った。今日の女性看護師は「お腹が張っているのが痛みの原因の一つだと思うから、なるべくオナラを出すように」と言うが入院してから一度も出たことがない。9時頃従弟の史朗（横浜在住）、ジム仲間の奥津さん、マンション隣家の細川さんにそれぞれ電話して事情を報告した。史朗は今日自分が入ることになっている軽費老人ホームの責任者と面接することになっているそう。毎日何も食べられずリンゲル液と抗生物質の点滴をされているのに、患部の痛みは小さくならない。この分では医師の言う通り10日という日数は必要なのかも知れないと暗澹とした気分だ。（以下略）

吹く風に秋の気配が・・・

2020年10月5日（月）

（中略）10時頃Kさんから電話。今、交渉中の「ココファンレジデンス小田原」から「今月中に入居手続きを済ませなければ、待機中の他の人に権利が移る」と言われたとのこと。急な展開に焦ったが、こうなれば覚悟を決めるしかあるまい。私が1日に実際に見学に行ったとしても、結論は同じだっただろう。人生は思い通りに都合よくは行かないものだ。「急な入院でお世話をかけます。よろしくお願いします」と言って電話を切った。昼頃、佐々木（洋・11期生辰巳グループ）がわざわざ辻堂から髭剃りシェーバーを届けてくれた。早速開梱して付属の電池を入れ、伸び放題だった髭を剃った。（中略）病室の前の廊下に数人掛けのソファがあり、テーブルには書籍や雑誌が数10冊おかれていて気分転換のためよくそこで座っている。すぐ横に窓があり最初の頃は全部解放されて心地よい風が入ったが、さすがに今は開いている部分は10センチ位。それでも入って来る風に時々冷やっとなることがある。季節は完全に秋だ。（以下略）

小田原蒲鉾老舗の「丸う」が倒産

2020年10月6日（火）

今朝の目覚めはあまり爽やかとは言えなかった。外はすっかり秋の気配。廊下の窓から外を見ると数人の小学生が連れ立って登校するのが見えた。そのあとから若い女性が颯爽と歩いて行く。（中略）ソファに長時間座っていると窓から入って来る風が肌寒い。支給されたタオルを羽織って寒さをしのいだ。今日私を驚かせたのは中澤からのラインによる情報の「丸う」の倒産だった。小田原蒲鉾の老舗「丸う」は私の生家のすぐ近くにあり、幼い頃から慣れ親しんだ店だった。私より二つ年下の可愛い娘がいて登下校の時はいつも私の生家の前を通っていた。城内小学校6年生時の秋の学芸会で生徒たちによる演劇（題名は忘れたが「狸」が主役）に私、望月郁文（故人）、水口幸治、井上久嘉（故人）、早野修司（故人）、平井幹など6年4組級友と、当時4年生だった「丸う」の娘などが出演していた。（巻末に写真掲載）

（省略）

2020年10月7日（水）

土曜日まで絶食は延期

2020年10月8日（木）

（中略）午後主治医から2階外来の診察室に呼ばれた。レントゲン写真やパソコンのデータを見ながら話してくれた。血液中の二つの値（白血球とCRP）がなかなか下がらない。これがよくなならないうちは絶食は解禁できない。17日の土曜日まで延長します。とのことだった。今日は夕方以後廊下に出ると肌寒さを感じた。季節は容赦なく進んでいる。

友人たちとLINEでトーク

2020年10月9日（金）

（中略）Lさん（韓国人女性）が変わらずラインでトークしてくれるのが、何よりも励みになっている。ココファンが健康診断の書類を持って来たのでM医師に預かって貰うことにした。今日の看護師は中国人の「傅蓉」さん。トンボ眼鏡の劉さんと同期だ。傅蓉さんは眼鏡はかけていない。外は一気に寒くなったようで院内の空気も冷えて来た。ラインで辰巳の皆とグループトークをしていい退屈しのぎになっているが、今日は水口（幸治・11期生で幼少時からの友・辰巳グループ）が丹羽病院の虫垂炎の治療法について疑問をぶつけて来た。何かの医学書を読んだらしく、これ程時間がかかるなら何故手術して切ってしまうのか、というものだった。それに対して私が医師の説明と自分のそれまでの知識とを織り交ぜて手術をせず、投薬で治療するという今の医学の考え方を説明すると、納得してくれたようだった。これには40代の頃に虫垂炎にかかり、切除する手術を受けた佐々木も話に加わり、失われた自分の虫垂を惜しんでいた。中澤はこの話題には乗って来なかったが午前中に新聞と週刊誌を届けてくれた。廊下のソファに座っていると、これから退院するという男性がいてその服装がジャンパーを着込んだ冬の格好なので外の気温が相当低いことがわかった。看護師も「今日は寒い」と言っている。午後吉男さんが頼んだものを届けてくれた。早速それまで着ていたランニングシャツを脱ぎ半袖シャツに着替えた。それまで感じていた肌寒さは感じなくなった。今日も長い夜が始まる。

（省略）

2020年10月10日（土）

（省略）

2020年10月11日（日）

（省略）

2020年10月12日（月）

（省略）

2020年10月13日（火）

旧友根岸君が同じ施設に入居するらしい？

2020年10月14日（水）

6時頃珍しく男性看護師が採血にきた。その後点滴をセットしに来たナースが「抗生物質が強いものになった」と言うので、前回の血液検査の結果がよくなかったのか？と新たな不安が襲ってきた。ナースの一言一句が不安を掻き立てる。我ながら全く損な性分だなと自嘲した。中澤が差し入れてくれた石原慎太郎の著書「老いてこそ生き甲斐」を読み始めた。慎太郎は好きな人物ではないが内容は意外に面白い。11時頃主治医のM医師が来室。CTスキャンの結果を話してくれた。炎症はほとんど消えたが完全ではない。しかし絶食は今日の朝までとしてお昼から重湯の食事を出しますとのこと。但しそれによって悪化することもあり得ますとも。正直に言ってあまりものを食べたいと言う気持ちはほとんどない。それより薬の効き目を強くしてでも炎症を消滅させて欲しいと思ったが、先生の言うことに従うことにした。12時に食事が運

ばれてきた。重湯と昆布茶、それに蜂蜜入りのミルクだ。いずれも微量でほとんど飲んだ気がしない。16時頃Kさんから電話がかかった。保証人等を代行してくれる業者が23日午後に私の自宅まで来てくれるそうだ。日にちに少し余裕ができたので、一安心だ。なんだが気分が落ち着いた。今日、ラインのトークで佐々木から我々の同期生根岸俊郎君が「ココファンレジデンス小田原」に10月22日から入居すると言う情報が入った。彼の状況からすると恐らく介護付きの個室に入るのではないかと根岸君とは城内小で1年から3年まで同じ4組で机を並べた。小学校に入って最初に仲良くなった友人の一人だった。思いがけない同級生再会となりそうだ。夕方の二度目の食事はミルクがココアに変わったかが他は同じだった。

えっ？若い女性患者がいる！

2020年10月15日（木）

（中略）昼頃に中澤が「週刊文春」と「週刊新潮」を届けてくれた。ソファでそれを読んでいるところへ主治医のM医師がやって来て「退院のめどは来週火曜日」という。来週の金曜日には大事な来客があるので必ず在宅していなければならない。それまでに退院できなければ、その日だけでも帰して欲しいと言うと「それは可能でしょう」と言っていた。今日の昼食は流動食が3食続いたあと初めて固形物が出た。ごく小さなカステラのようなパン、ポテトサラダ、それに卵焼きだ。何だか食べ方を忘れてしまったようでごちない食べ方になってしまった。午後私がいつも利用している廊下のソファになんと若い女性が座って本を読んでいる。周辺にいるのはほとんど私より年長らしい男性患者ばかりなので、この時は一瞬目を疑った。この病棟には女性患者もいたんだと。顔は下半分がマスクに覆われていて、上半分はかなり大きなフレームのメガネをかけているので美醜はちょっと見当がつかないが、年齢は20代後半くらいか？今どきの若者はヒマさえあれば、いやヒマなどなくてもスマホと「にらめっこ」しているというのが普通なので、ソファに座って本を読んでいるという図は私には大変新鮮に見えた。最初に見かけた瞬間から「この娘さんとはまともな会話ができそうだ！」と感じるものがあった。16時半頃待望の採血予告がやって来た。そろそろいい数値が出てほしいものだ。夕食は三分粥サワラの塩焼、豆腐、それにミルク。確かにだんだん増えてきた。夕方吉男さんと史朗にそれぞれ電話。来週の火曜日になりそうだということを伝えた。史朗はすでに決めてある軽費老人ホームに11月中旬に入居することにしたという。彼は1947年（昭和22年）生まれでこの時は73歳。私の母がきょうだいが多かったせいで私にはいとこが大勢いたが殆どこの世を去り、今生き残っているのは今年（2022年）米寿になった私の姉ともう一人の従弟（80歳・横浜港北区在住）。わずか4人になってしまった。姉と港北区の従弟は認知症。幼い頃から慣れ親しんできた従兄弟同士の私と史朗が、身体は健康だがほぼ同時期に老人ホームに入ることになった。

女性患者と言葉を交わす

2020年10月16日（金）

（中略）今朝の採血の結果を気にしながら横になっていると、10時半頃M医師がやって来て、指で丸印を作りながら白血球が79になったこと、もう一つの方（c r p）は1.9になったことを告げた。これでほぼ来週の火曜日には退院できるということだった。これで少し退院が現実味を帯びてきた。食事は一食ごとに段階を踏んでいるようで、ご飯は今日の昼は五分粥と鯖一切れ。患者の出入りは激しく今日も二人退院して行った。昨日廊下のソファに座っていた若い女性は今日も来ていて、前のテーブルに乱雑に置かれていた書籍や雑誌を丁寧に並べ直している。このテーブルには小説、随筆、漫画、月刊誌、週刊誌などが乱雑に何十冊も置かれている。それをある程度系統的に整理して並べ直している。私が友達にラインを送るためにやむを得ず隣に座るとき「きれいに並べたね」と声をかけると嬉しそうに頷いた。並べられた書籍の中に先日（9/27）自殺した女優竹内結子が主演したドラマの原作本（ストロベリーナイト）があるのでそのことを話すと自分もそのドラマを見たと言っていた。ちょうどその時期は有名なタレントの自殺が相次いでいたので、ひとしきりその件が話題となった。彼女はこの病棟の渡り廊下を挟んだ向かいの病棟にいるそうだが、同室の中国人の女性が喧しいので避難してきたという。主治医は私と同じM医師だった。今日は全ての点滴が4時という早い時間に終わったので助かった。

箱根駅伝予選会で母校中大が2位通過

2020年10月17日（土）

（中略）ラインで中澤が今日は箱根駅伝の予選会があることを教えてくれた。そして昼頃に中大が2位で予選を通過したことも。中澤に感謝。昨日話をするようになった若い女性患者に読み終わった週刊誌をあげた。彼女は年齢は30歳前後、現在無職で上大井で両親と同居している。兄が一人いるが兄妹仲は良好とは言えないようだ。病名は私と同じ虫垂炎。お腹が痛いので自らこの病院にやって来たという。禁食で点滴中。几帳面な性格でテーブルの上に乱雑に置かれていた書籍や雑誌を丁寧に並べ直していた。文学や映画などにも結構知識があり、私と話が合う部分もかなりあった。家や仕事で使っているパソコンのネットやアプリケーションソフトの操作方法などについてもいろいろ質問された。（以下略）

美女にパソコンのレクチュア

2020年10月18日（日）

昨日は全国的に真冬のような気温で冷たい雨が終日降り続いたらしい。今朝は起きて7時頃廊下の窓を開けてみると明るく見える。気温もそれほど低くはないようだ。退院の日までこの天気が続いてくれることを願う。朝スマホのバッテリーが残り僅かになってきたので電源を切って充電を始めた。まもなく中澤が新聞、ミカン、リップクリーム、ハンドクリーム、手袋などいろいろなものを差し入れてくれた。全く中澤には感謝してもしきれない。充電が終わったので電源をオンにしてみると辰巳の仲間か

ら何件ものトークが着信していた。ヒマをもて余していたのでしばしグループトークに時を過ごした。そのうちにあの若い女性患者がやって来た。なんと手にノートパソコンを抱えている。私にエクセルやその他操作方法などを教えてほしいそうだ。聞かれたことは大体私の守備範囲だったので大過なく質問には答えることができた。画面の下部にアプリケーションをワンタッチで起動できるアイコンがあるが、そこに「WORD」を加えてあげると、それまで他の場所にあったアイコンで「WORD」をクリックしても「ネットに接続していない」というメッセージが出て起動出来なかったが、このアイコンからなら「ちゃんと起動できます」と言って喜んでいる。更に山が好きでよく行っていると言うので、私も昔はよく山に登っていたことを話した。彼女は女子大学の名門「東京女子大学」の出身だそうだ。度が強そうなメガネをかけ、すっぴんだからといって大きなマスクを掛けているので容貌はよくわからない。一旦昼食のためにお互いに自室に戻ったが午後になると、お母さんが差し入れてくれたという漢字の知識を問われるクロスワードクイズのようなものが満載された雑誌を持ってきた。書き込んでいる様を見るとなんと私と同じ左利きだ。但し、私は文字を書くときと鋏を使う時は右利きになるが・・・結構私と共通点の多い女性のようにだ。問題を一緒に解いた。彼女が知らない四字熟語などかなり私の知識が役立った。

インテリ美女とお別れの挨拶を・・・

2020年10月19日（月）

今日は月曜日。主治医のM医師が出てきて今朝採血された血液検査の結果による最終判断が下される筈だ。なんとかいい結果であってほしいと願っている。しかし、待てど暮らせど主治医はやってこない。とうとう昼食の時間になったがまだ来ない。食後廊下のソファにあの女性患者が座っていた。マスクを外して化粧した顔はなかなかの美人だった。名前はMさん。彼女も医師が来るのを待っているという。同室の女性患者の話などを聞いているとき、廊下の向こうからM医師がやって来た。先に彼女と話した後で私を呼び明日の退院を告げた。但し白血球の値がいまいちなので、明日の午前中までは抗生剤の投与を続け、退院は午後になるという。ソファに戻って吉男さんに連絡していると、私に別れの挨拶をするためにMさんがやって来た。着替えをし、眼鏡をコンタクトレンズにしてマスクをかけていない彼女は目を見張るような美人だった。挨拶をされなければこの人が15日から5日間、廊下のソファでおしゃべりをした「大きなマスク」で「トンボメガネ」で「すっぴんフェイス」の若い娘と同一人物とは分らなかっただろう。こんなインテリ美女と5日間という束の間だったが親しくできたのは全く幸運だった。彼女の方は今日これから退院するという。先を越されてしまった。「ありがとう。貴方のお陰で退屈しなかった」というと「私もです。いろいろと教えてくださったり、面白いお話を伺うことができてうれしかったです。ありがとうございました」と言って去って行った。スタッフがやって来て、退院前に決められたことだと言って私の身長と体重を計測して行った。そして費用の概算を出

してもらったところ、7万5千円プラス自費だという。自費というのはココファン提出用に依頼した健康診断書のこと、金額は2万円か3万円だという。随分高いなと思ったが相手が中国人のナースなので、それ以上は追及しなかった。Kさんに電話したところ、明日の16時に丹羽病院が発行した健康診断書を取りに来るという。引越の業者も手配してくれるようだ。せっかく退院が決まったのにあまり心が弾んで来ない。退院後直ぐにココファン入居のためにやらなければならないことが山積しているからか？Lさんに退院を知らせたが、返信に外は冬のような寒さで暖房を入れたとある。明日は寒くなければよいが…今までずっと私の係だった中国人のナース傅蓉さんは明日は休みだと言うので、今日お礼とお別れを言っておいた。

やっと退院できた！

2020年10月20日（火）

退院の朝が あけた。廊下には久しぶりに窓越しの日が降り注いでいる。ソファーに座ると寒さではなく、暖かさを感じる。（中略）12時に最後の食事。じっくりと味わって食べた。ナースが最終の確定した金額を教えてくれた。72020円。健康診断書の金額は2020円だった。内容を見ると各項目は全て「異常なし」これで安心してKさんに渡すことができる。13時に吉男さんが迎えに来てくれ、お金を借りて支払いを済ませ、22日ぶりに外へ出た。ヤオハンに寄ってもらって直ぐに食べられる焼きそばなどを買って13時半頃帰宅した。吉男さんが帰った後、関係者に電話したり郵便物を整理したりしている時にKさん来訪。健康診断書を渡し今後のスケジュール等を打ち合わせた。

結び

私は親が丈夫な身体に産んでくれた上に自分自身も日常の運動の継続などの効果があったのか幼少時から成人後も殆ど病気というものに無縁で過ごしてきました。人間ドックなどの「検査入院」は何度かしましたが、病気で入院したことは今回の「79歳になってからの急性虫垂炎」が初めての経験でした。初めての入院が15日間に及ぶ絶食生活になるとは・・・しかし、22日間の味気ない入院生活の最後の5日間に同じ急性虫垂炎で入院していた若いインテリ美女と交流ができたことは全く幸運でした。彼女との邂逅がなければ15日間に及ぶ絶食生活はとても乗り切れなかったかもしれませぬ。苗字しか知らない「大井町のMさん」、貴方と出会えて、私の生まれて初めての入院生活は明るく楽しい思い出になりました。いつの日かまたどこかの地でお目にかかることができればこの上ない幸いです。

2022年9月

山本 哲照



13年間一人で暮らした共立城山マンション。城山陸上競技場直下にある。



インテリ美女との邂逅があった丹羽病院



右端水口幸治、望月郁文の背に手を置いている。左から3人目の白い上着の女子が田代（丸うの娘、当時4年生）



後列左から井上久嘉、水口幸治、岩本先生、二人置いて望月郁文、
前列左から平井幹、3人置いて山本哲照、一人置いて早野修司、二人
置いて田代（丸うの娘）